山風と記憶を辿る線を引くまでのあいだ

地上は時代と共に姿を変えていくけれど、山の上は永い時間を経ても元々の姿が多く残っている場所のひとつだと思う。そこからは地上を見渡すことができる。知らない街に来たら、まずは山に登ってみるといい。その街の現在の姿といつかの姿、両方が見えてくるから。

群馬県太田市のシンボルとされている金山やその周辺の山々には、長くまっすぐ伸びた松がたくさん生えている。そんな山に登り、松や草木を眺め、お互いを想いあい、歌を詠んでいたのが歌人の大槻三好と松枝だったのかもしれない。そう推測しか出来ない理由は、大槻三好と松枝を知る手掛かりが三冊の本しか無かったからである。三好は、20〜25歳までの短歌を収録した『白墨の粉』、26〜30歳までの短歌を収録した『花と木馬』の二冊を発行。松枝は、三好との子供を産んで一ヶ月も経たぬうちに25歳という若さで亡くなり、その後、三好が遺稿を編集・装丁した『紅椿』を発行している。当時の生活が浮き上がってくる短歌に親しみを感じつつ、自分にとっても記憶に新しい年頃に、こんなにも切ない別れがあったのかと、胸をつかれた。

三好と松枝はともに小学校の教員を仕事として、三好は時に油絵を描き、松枝は自分の身体の弱さを自覚しながらも生と死の狭間で揺れ動いていた。短歌を通して自分の恋心をストレートにぶつけていく松枝にとって、短歌は恋文の代わりでもあったのかもしれない。文藝誌にそれを掲載したり、ノートにしたためた短歌を三好に見せて批評を求めて困らせた、ということもあったらしい。それでもお互いが純粋に想いあっていたことは、二人の短歌を読めば感じ取ることができる。

時系列を組み立てて三冊の本を読み解いていくと、二人が同じ山道を歩いていたであろうこと、言葉を投げかけた先に相手がいたであろうこと、相手の不在に想いを馳せていたであろうことなどが見えてくる。短歌のセレクトをする際には、そう読み取れる短歌を交互に並べてみた。

松枝はひとりの女性・妻・母として、残された時間の重さに精一杯抗っていたように見える。また三好は、父の顔を知らずに育ち、松枝と結婚して子供が産まれ父になった矢先に、自分にとっての妻を、子にとっての母を亡くしてしまった。奇しくも繰り返すように入れ替わる家族のかたちに、父として向き合う戸惑いを抱えながらも、生活を歌に綴ることを続けていた。

三好は『花と木馬』の後記に「私の歌は私の生活記録で、他の何ものでもない。」と記している。慎ましくも純朴に過ごしてきた彼等の生活が、確かにこの街に在ったことを、夫妻の短歌を通して知った。

この街のいつかの時間を現代の同じ街で蘇らせるならば、その記憶を辿って引く線は、現代の街へと導く線となるようにしたかった。歌の合間に山の方から吹いてきた風がそよぐ。線も揺らぐ。美術館の北に金山が見える。あの山に登ったら、同じ風を感じることができるだろうか。歌にならい、ぶらり山に行ってみようか。

惣田紗希

[参考作品]大槻三好『白墨の粉』(芸術と自由叢書)
紅玉堂書店、1929年

[参考作品]大槻三好『花と木馬』
素人社書屋、1934年

[参考作品]大槻松枝『紅椿』(芸術と自由叢書)
紅玉堂書店、1930年